

岐阜県の植物

高橋 弘(岐阜大学教育学部)

Takahashi Hiroshi : Noteworthy plants at Gifu Prefecture

岐阜県は広い気候帯を持っていることを反映し、植物相が豊富である。しかし、他の地域に比べて詳しい調査が遅れていた感は否めない。それは以下に触れるように、最近になって多くの新分類群が知られるようになったことから伺える。ここでは、低地を中心に生育する植物に限定して、分布上注目し値する岐阜県産植物について、長野県との関係を意識しつつ概説し、最後に長野県産のホトギス属植物について簡単に触れたい。

1. 東海丘陵要素

東濃地方にある湿地には、植田(1989)が東海丘陵要素と名付けた植物群の多くが見られる。東海丘陵要素は井波(1966)が「周伊勢湾要素」と呼んだ伊勢湾を囲む一帯に特徴的に分布する植物のうち、東海地方の低湿地に生育するものとされている。植田が挙げた東海丘陵要素のうち岐阜県に分布する植物は次の通りである。カッコの中は岐阜県以外の分布地である。

シデコブシ(愛知, 三重)

ハナノキ(長野, 愛知)

ヒトツバタゴ(長野, 愛知, 対馬)

ミカワバイケイソウ(長野, 静岡, 愛知)

ウンヌケ(静岡, 愛知, 香川, 徳島, 福岡, 朝鮮半島, 中国)

シラタマホシクサ(静岡, 愛知, 三重)

カンサイガタコモウセンゴケ(静岡, 愛知, 三重, 滋賀, 奈良, 京都, 大阪, 兵庫)

ヘビノボラズ(長野, 愛知, 三重, 滋賀, 奈良, 宮崎)

ミカワシオガマ(静岡, 愛知, 広島)

マメナシ(長野, 愛知, 三重)

この他に岐阜県で確認されていないナガバノイシモチソウ, ナガボナツハゼ, ヒメミミカキグサが含まれている。

これらのうちシデコブシ, ハナノキ, ヒト

ツバタゴ, ミカワバイケイソウは岐阜県にも多く見られるようである。しかしながら、これらがセットで出現する湿地はほとんどない(菊池ら, 1991参照)。ヒトツバタゴは立地が他のものとやや異なるところがあるのかもしれないが、そのようなことを調べることで困難なくらい個体数のまとまった集団が極めて少なく、ほとんどの分布地は少数個体が散在するだけである。従って、自然状態での種の存続という点で危機的な状態と言える。ハナノキも状況は似ており、このままだと天然更新はほとんど不可能になるだろう。ミカワバイケイソウはかなりの個体数からなる集団もあるものの、草本であるが故に、より深刻な危機にある。湿地の開発は急速に進行しており、ヒトツバタゴやハナノキの大木の場合は、湿地の大部分が埋め立てられても、樹そのものが辛うじて残されていれば当分は生存できる可能性もあるが、ミカワバイケイソウの場合は大きな集団であっても、埋め立てられればそれで壊滅的打撃を受けるのである。

東濃地方には他にも注目すべき植物がある。モンゴリナラと言われることが多いが、実態がよく分かっていないナラの仲間がある。カザグルマ, ミズギボウシ, イワショウブも湿地によく出現する。最近ネコノメソウ属の新種があることが分かった(若林・高橋, 1994)。

2. 他の注目すべき植物

以前から岐阜県に固有として知られていた植物にミノシライトソウがある。これは、しかし、シライトソウの変種あるいは亜種とされているので、固有種というわけにはいかない。すなわち、原寛先生はこれを初めシライトソウの変種として記載され(Hara, 1961)、後に亜種に組替えられた(Hara, 1968)。染色体数がシライトソウ $2n=24$ に対してミノシライトソウは $2n=42$ とかなり違うが、外部形態的差異が

小さいことから同種とされたのである(原・黒沢, 1962)。けれども, 少なくとも両者は簡単に見分けが付き, もっと外部形態が似ているが明らかに別種だと考えられる植物群も多くあるので, 同種とする根拠は弱いように思う。

高山市在住の長瀬秀雄氏が, 湿地に生えるキセルアザミによく似ているが頭花が点頭せずに直立するとして注目し, Kadota and Nagase (1988)により新種として記載されたヒダキセルアザミは, 飛騨地方に固有である。同じく長瀬秀雄氏により見いだされたヒダボタンはボタンネコノメソウの変種とされ(若林, 私信), 今のところ岐阜県のみ知られているが(長瀬ら, 1991), 長野県や福井県にも分布する可能性がある。ヒダボタンの根出葉はボタンネコノメソウより大型で, 葉脈が不鮮明, がくは黄色である。また, 二村延夫氏, 長瀬秀雄氏それに長野県の奥原弘人氏が, スズカアザミに似ているけれども花時に根出葉が生存することや水湿地を好むことなどから, それと異なる分類群としてリョウノウアザミと名付けたもの(奥原, 1988)(門田, 1991; 長瀬, 1991; 二村, 1991も参照)は, 岐阜県の南東部と長野県にある。ミヤマチョウジザクラは岐阜県が分布の中心で, 長野県南西部と福井県東部にもある(渡辺, 1989; 長瀬・二村, 1991; 川崎・小山, 1994)。このミヤマチョウジザクラはチョウジザクラの変種のオクチョウジザクラに似ているものの, 葉やがく等の形質がかなり異なることから, 久保田秀夫氏が別の変種と考えて名前をつけて居られたもので, この度川崎・小山(1994)により正式に学名が付けられた。

飛騨の金山が基準産地になっているヒダアザミは, 岐阜県東部, 愛知県北東部, 静岡県北西部と共に, 長野県南西部に僅かに分布する。しかし, 滋賀県の綿向山を基準産地とするワタムキアザミとの関係がまだ十分に分かってはいない(近田・高橋, 1988)ので, 課題が残されている。チャルメルソウの変種ミカワチャルメルソウは岐阜県的美濃地方に広く分布する。これは花卉が7-9(-11)裂することで,

3-5裂するチャルメルソウと区別されるが(Wakabayashi, 1977), どちらともいい難い植物もよく見られる。エンシュウツリフネソウは岐阜県南西部に見られ, 恐らく貴重な分布地の一角であろう。岐阜県中南部にあるクロヒナスゲは, 他には三重県と栃木県にしかないとされており, ここはやはり貴重な分布地の一つである。

スズカケソウは岐阜県西濃地方が唯一の自生地とされて来たが, 現在自生状態のものは無くなってしまったようである。それに代わるように最近徳島県で明らかな自生のスズカケソウが発見されたとのニュースは, 喜ばしい限りである。

3. 長野県のホテルギス属植物

日本にある12種のホテルギス属植物のうち, 長野県には岐阜県と同様に4種分布する(Takahashi, 1980; 高橋, 1987)。タマガワホテルギスは冷温帯域を中心に広く分布し, 北部では葉が広く, 南部では狭くなる傾向がある。これは岐阜県でも同じである。ヤマジノホテルギスは北海道南部から南へと全国的に分布するにもかかわらず, 北陸にはほとんど見られない。長野県においても, 北部にはほとんど無いようである。岐阜県においても富山県に近い地方はやはり分布しない(高橋, 1990)。ヤマホテルギスの長野県における分布は興味深い。全国的には関東以西の太平洋側に偏り, 広義のソハヤキ型に似るにも関わらず, 長野県だけは最北部まで分布するのである。下水内郡栄村でユキツバキと共存している(石沢・高橋, 未発表)。岐阜県では決して中北部には見られない(高橋, 1990)。ホテルギスは, 全国的な傾向としては明らかに太平洋側に偏っており, 長野県でも最南部にのみ知られていた。しかし, やはり栄村でホテルギスの生育が確認され(石沢・高橋, 未発表), 南北に分断されて分布することがわかった。これまでも日本海側地方で採られた標本が知られていたが, 実際に自生状態を確認できたことは意義深い。ちなみに新潟県の中魚沼郡にも生育している。

岐阜県と長野県は隣接しているだけでなく、地理的にも似ている。南北に長いにも関わらず太平洋にも日本海にも接していない。長野県は全体的に高い標高にあるものの、低地から高山帯までである。従って植物相も似ていると予想されるが、どちらも植物誌が完成していないこともあり、比較研究が充分なされているとは言えない。互いの情報交換が活発になることを期待したい。なお、この草稿は長野県植物研究会の1994年度総会で話しをさせて戴いた内容の一部に加筆したものである。

文献

- 二村延夫 1991. リョウノウアザミの調査の経過と分布について. 岐阜県植物研究会誌 8:55-56.
- Hara, H. 1961. A new *Chionographis* from central Honshu. J. Jpn. Bot. 36: 238-239.
- 1968. A revision of the *Chionographis* (Liliaceae). J. Jpn. Bot. 43: 257-267.
- 原寛・黒沢幸子 1962. シライトソウの諸変異について 植物分類地理 20: 34-38.
- 井波一雄 1966. 岐阜県の植物地理概説. 岐阜県高等学校生物教育研究会(編)岐阜県の植物, 25-71. 大衆書房.
- 門田裕一 1991. 中部日本産アザミ属の新種—リョウノウアザミ. 日本植物分類学会第21回大会発表要旨集, p7. 日本植物分類学会.
- Kadota, Y. and Nagase, H. 1988. A new species of *Cirsium* (Asteraceae: Cynareae) from Hida Province, Central Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B 14: 9-20.
- Kawasaki, T. and Koyama, H. 1994. Entity of *Prunus apetala* var. *monticola*. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B 20: 151-156.
- 菊池多賀夫・植田邦彦・後藤稔治・佐藤徳次・高橋弘・高山晴夫・中西正・成瀬亮司・浜島繁隆 1991. 周伊勢湾要素植物群の自然保護(自然保護助成事業報告書). 世界自然保護基金日本委員会.
- 近田文弘・高橋弘 1988. ワタムキアザミとヒダアザミの形態的変異と分布. 植物分類地理 39: 83-93.
- 長瀬秀雄 1991. リョウノウアザミについて. 岐阜県植物研究会会報 30: 3-4.
- ・二村延夫 1991. 岐阜県におけるミヤマチョウジザクラの形質と分布 岐阜県植物研究会誌 8: 16-21.
- ・———・後藤常明・高橋弘 1991. 岐阜県産ネコノメソウ属とその分布. 岐阜県植物研究会誌 8: 1-15.
- 奥原弘人 1988. 新知見あれこれ(6). 長野県植物研究会誌 21: 16-17.
- Takahashi, H. 1980. A taxonomic study on the genus *Tricyrtis*. Sci. Rep. Fac. Educ., Gifu Univ. (Nat. Sci.) 6: 583-635.
- 高橋 弘 1987. ホトトギス属の分布と植物地理学の問題. 植物分類地理 38: 123-132.
- 1990. 岐阜県産ホトトギス属とその分布. 岐阜県植物研究会誌 7: 8-11.
- 植田邦彦 1989. 東海丘陵要素の植物地理. 1. 定義. 植物分類地理 40: 190-202.
- Wakabayashi, M. 1977. A note on *Mitella stylosa* and allied species (Saxifragaceae). Acta Phytotax. Geobot. 28: 111-122.
- 若林三千男・高橋弘 1994. ネコノメソウ属, シロバナネコノメソウ列の一新種. 日本植物分類学会第24回大会プログラム発表要旨集, p8. 日本植物分類学会.
- 渡辺定路 1989. 福井県植物誌. 渡辺定路.